

マラヤーラム語のいわゆる Supine について

家本太郎

1-1. マラヤーラム語（南インド・ケーララ州を中心に行われているドラヴィダ系言語。中期タミル語の西部方言から、西紀14世紀頃に分離したとされる）において、動詞語幹或いは、未来時制形成語幹に *-ān* が付加された形式は、これまで supine 機能を持つとされ、supine (Andronov 1996:141), infinitive (Agesthalingom 1979: 93), purposive infinitive (Andrewskutty 1971:11), adverbial participle of the future tense (Frohnmeier 1979:41), 未来分詞 (Itô 1978:28), infinitiv (Lehmann 1994:115), infinitive mood (Peet 1972:73), puroposive infinitive (Ramachandran 1973:233), infinitive form (Subrahmanyam 1971:425) などと記述されてきた。概略、以下の4つの機能をもつとされる。

1-2. 動詞を支配し、目的を示す当該形式は、以下の例に見られる。

(1) *ñāññaḷ sinima kāñān pōkunnu*. 「我々は映画を見に行く」

(2) *ñān ayāḷōṭu pōkān paraññu*. 「私は彼に行くように言った」

(3) *avan jivane rakṣippān vēṇṭi tanikkāyi oru valī anvēṣikkum*. 「彼は自らの命を救うべく、道を探す」

また、Frohnmeier(1979:40)の記述にあるように、「意向」を示すためにも用いられる。

(4) *oṭuvil addēham kaliṅga rājyatte ākramiccu kiḷaṭakkān tīrumāniccu*.

「ついにその方はカリンガ国を攻め、侵攻しようと決意なさった」

1-3. また、可能動詞を支配することができる。

(5) *ī manuṣyare viśvāsikkuvān pāṭilla* 「これらの人々は信用することはできない」

(6) *jalamayamāya bhakṣaṇapadārthaññaḷ mātramē vērukaḷkku valicceṭukkuvān sādikkū*. 「根は液状の栄養のみを吸収することができる」

(7) *ñān pravṛtti ariyunnu, enne eḷuppattiḷ paṭṭippān kalikayilla*. 「私は業務に精通している。誰も私をだますことはできない」

1-4. 更に、*-ān* の付加された動詞の語彙的意味が許容する場合は、名詞句

前置要素として機能する。

(8)*pularuvān raṇṭu nālika uṇṭu*. 「夜が明けるまで2時間ある」

1-5. 名詞化不定詞に近い用法は次の例である。

(9)*kakkuvān₁ paṭhiccāl ñēluvān₂ paṭhikkēṇaṃ*. 「盗むこと」をおぼえるなら、
刑をうけることを覚悟せよ」

2-1. ところが、supine 本来の、或いは派生した機能では説明できない用法が幾つか見られる。Andronov(1996: 142)は、-ān の機能を supine に限定しているので、以下に見られる機能の記述を “There are constructions with lexically appropriate verbs and other words in which supines can perform some other functions as well;” と述べ、明らかに誤魔化していると言える。

2-2. まず、複合動詞の前項として機能する場合である。

(10)*ahimsā mutalāya tatvaññaḥ pracaarippikkān tuṭaṇṇi*. 「(彼は) 不殺生などの原理を広め始めた」

(11)*muyal varān tāmasikkunnatu kaṇṭu simhattinu vaḷare dēṣyam vannu*.
「兎が来遅れた (= 来るのが遅くなった) のを見て、獅子は大層憤怒した」

但し、例文(12)のような、verbal participle と交替可能な場合と、交替した場合、例文(13)(14)のように意味が異なって来る場合がある。

(12)*avekku vila tāṇatu taṇṇi*. 「それらの値段が下がり始めた」

(13)*ayāl oṭi nōkki*. “He tried to run (successfully).” (Namboodiri 1980: 274)

(14)*ayāl oṭān nōkki*. “He tried to run (unsuccessfully).” (Namboodiri ibid.)

2-3. 名詞句限定不定詞に近い用法は以下にみるような、関係節に近いものであり、supine 機能からは逸脱している。

(15)*oru divasam siddhārthan.....vaḷare vayassāya oru strīyēyum oru śavattēyum kāṇān iṭayāyi*. 「ある日、シッダールタは大変な老齡の女性と屍を見る機会があった (= 目にした)」

2-4. 名詞化不定詞に近い用法は、以下の例にあるような participial noun に近いものであり、これも supine 機能からは逸脱している。

(16)*atum kāṇān vaḷare manōharam āyirunnu*. 「それを見物したのも大変楽しいものとなった」

2-5.上に管見したように、*-ān* が supine 機能を専らにしているとは言い難く、通時的にこの形式が遡源する古代タミル語の infinitive の持っていた4つの機能、purpose, effect, simultaneousness, verbal noun (Agesthialingom 1979:95)、または *konsekutive, finale, temporale, kausale Funktion* (Lehmann 1994:116) のうちの幾つかを保持していると捉えたほうが正しい。但し、量的には目的の表示が圧倒的に多く (Agesthialingom *ibid.*:93), *-v-ān, -p-ān, -pp-ān* を取る形式は僅かに留まる (Agesthialingom *ibid.*:95)。

3-1.この節では、動詞語幹に直接、*-ān* が付加された、*kāṇ-ān* 'to see' のような形式（強動詞の場合は、*naṭa-kk-ān* 'to walk' のように、*-kk-*が挿入される、ここではI型と呼ぶ）と未来時制形成語幹に同接辞が付加された、*grahi-pp-ān* 'to trust' のような形式（ここではII型と呼ぶ、異形態として、*-p-ā-n, -v-ān, -m-ān*）一從來から、これらは異形態であると記述されている一の間には幾つかの機能的な差異が見られることを指摘する。

3-2.まず、supine 機能は双方の型がもっている。

(17)(=1) *ñāññāḷ sinima kāṇān pōkunnu.*

(18) *niññāḷ ñāññāḷōṭukūṭe attāḷaṃ uṇṇān tāmasikkumō?* 「私たちと一緒に夕食を召し上がるために滞在なさいませんか」

3-3.叙法的な意味合いを含む場合、I型が用いられる。

(19) *avanre viḷi āru kēḷkkān?* 「誰が彼の訴えを聞くであろうか」

(20) *ammātiri oru makaḷ naṣṭappettua avarkku ā citraṃ entu samādhānaṃ nalkān?* 「娘を無くした者たちに、この写真がどんな慰めを与えるというのか」

(21) *tān cattu mīn piṭiccāl ārkku kūḷḷān ākunnu?* 「命を賭けてまで得た魚を誰が食べようや」

(22) *onnuṃ pēṭikkān illa.* 「少しも恐れることはない」

3-4.後続の動詞が過去時制となる場合は、I型が用いられる。

(23) *ā ṭrausaṟuṃ kuppāyavuṃ avan dhariccirikkunnavaṃyāṇennu avanu viśvāsikkān kaḷiññilla.* 「それらのズボンとシャツが自分の着ていたものであることを彼は信じることができなかった」

(24) *gōpi atu onnu eṭuttuyārttān śramiccu.* 「ゴーパーはそれを少し持ち上げようとした」

一方、命令形の動詞が続く場合は、II型が用いられる。

(25)ijju nalla manisan *āvān* nōkkēṇaṃ. 「善き人になるよう努めよ」

(26)niñṇaḷute kaiyeḷuttu *nannākkuvān* śramippin. 「字が上手になるよう努力せよ」

3-5.名詞を支配する場合であっても、I型は、意向、意志や未来性に拘束されない。

(27)(=(15))oru divasam siddhārthan.....vaḷare vayassāya oru strīyēyum oru śavattēyum *kāṇān iṭayāyi*.

一方、II型は未来性を保持している。

(28)pantraṇṭu maṇikkakaṃ ṇān varāññāl enne *kāttirippān* āvaśyamilla.

「12時までには私が来なければ、待つ必要はない」

(29)*tāmasikkān* iṭaṃ enikku illa. 「住むべき処が私にはない」

3-6.同様の現象は、名詞化された場合にも見られる。(30)がI型で、(31)はII型である。

(30)(=(16))atum *kāṇān* vaḷare maṇōharam āyirunnu.

(31)imḡliṣ saṃsārikkunnavane *grahippān* ṇāññaḷkku prayāsamāṇu. 「英語を話す人たちを信用することは難しい」

3-7.複合動詞前項として機能する場合は、I型が専ら用いられる。II型のもつ未来性と当該の機能が相容れないからであろう。

(32)avanṇe tala '*kīṇu kīṇā*' cuṇṇān tuṭaṇṇi. 「彼の頭はくらくらし始めた」

3-8.更なる機能的差異は、可能性と能力に関っているようである。(33)はI型で、(34)がII型である。

(33)niñṇaḷ aviṭe uṭane pōkaṇaṃ allāññāl onnum *ceyyān* kaḷiyunnatalla.

「今すぐに行かなければならない。さもないと何事もすることが可能でない」

(34)(=(6))jalamayamāya bhakṣaṇapadārtthaññaḷ mātramē vērukaḷkku *valicceḷukkuvān* sādhiikkū.

3-9.以上の機能的差異を概略、表示すれば以下ようになる。①のsupine機能は共有されている。②から⑥の分布については、I型の時制に関する非拘束性・不定性、II型の保持している未来性によって説明が可能である。⑦の機能が、それぞれの特性によって説明ができるのか、或いは、差異の指標自体になり得るか、不明である。

	I 型	II 型
①目的表示機能	有	有
②叙法的用法の有無	有	無
③後続動詞の範疇	過去形	命令形
④名詞前接時の未来性	無	有
⑤名詞化時の未来性	無	有
⑥複合動詞前項機能	有	無
⑦可能性・能力表示機能	可能性	能力

4.拙稿は接辞 *-ān* の諸機能・使い分け可能性の覚書に過ぎず、それらの現象の提示に留まったに過ぎない。*-ān* 構文が他の不定構文と如何なる関係にあるのか一機能的に棲み分けているのか、張り合い状態にあるのか一包括的な記述を近い未来の課題としたい。

参考文献

- Agesthialingom, S. 1979. A Grammar of Old Tamil with special reference to Patirruppattu (Phonology & Verb morphology), Annamalainagar: Annamalai University.
- Andrewskutty, A.P. 1971. Malayalam, Trivandrum: The Dravidian Linguistic Association.
- Andronov, M.S. 1996. A Grammar of the Malayalam Language in Historical Treatment (Beiträge zur Kenntnis südasiatischer Sprachen und Literaturen 1), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Frohnmeier, L.J. 1979. A Progressive Grammar of the Malayalam Language, Repr.2nd ed., New Delhi: Asian Educational Services.
- Itô, S. 1978. Malayālam (Asian & African Grammatical Manual No. 13y). Tokyo:ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Lehmann, T. 1994. Grammatik des Alttamil – Unter besonderer Berücksichtigung der Cankam-Texte des Dichters Kapilar (Beiträge zur Südasienforschung Südasien – Institut Universität Heidelberg Band 159), Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Namboodiri, E.V.N. 1980. Auxiliaries in Malayalam. Auxiliaries in

- Dravidian, ed. by Agesthialingom, S. & G. Srinivasa Varma, 261-290, Annamalainagar: Annamalai University.
- Peet, J. 1972. A Grammar of the Malayalam Language, Repr. 2nd ed., Osnabrück: Biblio Verlag.
- Ramachandran, P. 1973. Language of Middle Malayalam, Trivandrum: The Dravidian Linguistic Association.
- Subrahmanyam, P.S. 1971. Dravidian Verb Morphology (A Comparative Study), Annamalainagar: Annamalai University.

(いえもと たろう、京都大学)

«Note»

A note on Malayalam supine

Taro IEMOTO

The aim of this note is to argue that the Malayalam suffix *-ān* is to be defined as a pseudo-infinitive marker rather than an exclusive supine marker; specifically, that some of the *-ān* constructions are close to other non-finite forms, such as relative constructions or participial nouns in their functions. I will also discuss what kinds of parameters are relevant to some of the differences in two types of the *-ān* constructions which none of the previous analyses has taken into account.